

# 就任にあたって



消防庁長官 岡崎 浩巳

ずいぶん前のことだが、秋田県庁の課長時代に大地震に遭った。昭和58年5月26日の日本海中部地震である。秋田市の震度は5（強震）とされたが、市内でも地域によってはそれ以上であったと言われる。私が勤務していた県庁舎では窓ガラスが600枚も割れ、全半壊家屋は沿岸部を中心に2,500棟を超えた。また、憤砂や憤泥が広範囲に発生して「液状化被害」という言葉を一躍有名にした。さらに、最大波高14mという津波の威力は8tの消波ブロックを100メートルも押し流すほど強烈で、犠牲者のほとんどが津波によるものだった。私は自治省消防庁との連絡役を引き受け、行方不明者捜索のため、東京消防庁のダイバー隊に出動をお願いしたことなどを思い出す。

ところで、私はこの地震による犠牲者数について、秋田県内だけで100人を超えたものと思い込んでいた。今回改めて調べてみると、実は県内では83人で、青森県等を含めて104人（うち津波による死者100人）であった。あれだけ復旧対策に精魂込めた災害の犠牲者数の記憶が、いつの間にか曖昧になっていた。

秋田から自治省に復帰し、自治大臣秘書官を務めていた平成元年8月に、京浜地方を襲った集中豪雨による崖崩れで消防職員が3名殉職し、大臣自ら殉職者のご自宅に弔問に伺ったことがある。弔問先が横浜市内だった（この記憶もやや自信が無い・・・）ためか、殉職した3名の所属は横浜市消防局だと長らく思い込んでいたが、実は川崎市消防局であったことを今回確認して、自分の記憶のいい加減さに、情けない思いになった。

記憶力に自信のない自分を例に挙げてものを言うのはいささか気が引けるが、人間の記憶というものは時の経過とともに風化する。忘れても良い記憶や忘れた方が良い記憶もあるだろうが、決して忘れてはならない記憶もある。災害による教訓などは、後者の典型であろう。しかし、東日本大震災の大津波のような記憶さえ、数十年もすれば風化してしまうかもしれない。痛切な記憶と教訓を常に学び直し、次世代に確実に伝えていく必要があると思う。

ところで、昔の人は記憶を風化させないための知恵のひとつとして、災害の記憶を地名に刻み込んだのではないと思う。長崎県の部長時代に雲仙普賢岳災害の対応に当たったが、被災地周辺には焼山とか礫石原くれいしぼるという200年前の大噴火を想起させるような地名があった。焼山付近は平成の噴火でも火砕流に見舞われた。また、長崎市には鳴滝なるたきや滑石なめしという地名があり、ともに昭和57年7月23日の長崎大水害で地滑り等の被害が出ている。これらの地名の本来の由来を確認したわけではないが、昔からの地名について防災の視点から再考する必要があるような気がしている。

閑話休題。9月11日付で消防庁長官に就任いたしました。

就任にあたり、私が公務員になってすぐの初任者研修における大先輩の講話で聴いた「ボヤは防げないが、大火は防ぐことができる」という話を思い出しました。36年も前のことですが、不思議と風化せず、しっかり記憶しています。突発的なボヤは防ぎようがないが、乾燥・風向などの条件が悪いときには特に「火の用心」に努めつつ適切な消防体制をとれば大火に到ることはない、という趣旨でした。状況に応じて準備と鍛錬を怠らなければ何事も克服できるという、重い教訓を含む言葉だと思います。

消防庁長官として、初心を忘れずに、国・地方を通ずる消防防災・危機管理体制の充実強化に全力を注ぐ所存です。皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。